



「アディポ健診」始めました 市立小樽病院

自動販売機でチケットを購入し、手軽に健康診断を受けられる「プチ健診」で話題の市立小樽病院(北海道)が、今度は新たに「善玉ホルモン」と呼ばれるアディポネクチンを調べる「アディポ健診」を開始した。

メタボ対策の切り札として注目を浴びるホルモン物質を手軽に調べられる健診とあって注目を集めそうだ。

アディポネクチンは「脂肪」(アディポ)を「くっつける」(ネクチン)という語源をもつホルモン物質。インスリンの効きをよくして糖尿病を抑えたり、血圧を下げたり、血管の炎症を抑え動脈硬化を防いだりする。

この物質は、脂肪細胞から分泌されるが、太ると脂肪細胞が膨れて、分泌量が減る。一般に「太ると生活習慣病にかかりやすくなる」とされるが、これはアディポネクチンが減少するためとみられている。

また、世の中には、小太りでも病気が知らずの人がいれば、体重が少し増えただけで動脈硬化が進む人もいますが、これもアディポネクチンの量に関係していると考えられている。

このアディポネクチンを健康管理に役立ててほしいと、同病院では21日にアディポ健診をスタートさせた。健診では、採血と動脈硬化検査を実施し、アディポネクチンとHDL・LDLコレステロールの数値、動脈硬化の度合いを調べる。通常だと結果は利用者に郵送されるが、アディポネクチンはなじみの薄い物質なので、同病院は利用者に来院してもらい、医師が直接、結果を伝え、助言することにした。

(2月28日付読売新聞)

食べ物やごみ放置 セルフネグレクトの 高齢者 1500人

医療や食事を拒み、食べ物やごみを放置。健康や安全を自ら損なう「セルフネグレクト」(自己放任)と呼ばれる状態の高齢者が、2008年度に全国で1528人確認された。放置すると孤独死や「ごみ屋敷」につながりかねないが、対処が難しく、医療・福祉の課題になっている。全国調査は初めて。

岸恵美子帝京大教授(地域看護学)らの研究グループが2009年12月～2010年1月、地域介護の拠点で

ある全国の地域包括支援センター4038か所に調査票を送り、1046か所(26%)から回答を得た。

生活上当然すべき行為をせず、安全や健康が脅かされる状態をセルフネグレクトと定義し、65歳以上の人のケースを尋ねたところ、499か所のセンターで計1528人だった。ホームレスは除いた。

詳しく書かれた846人を分析すると、男女ほぼ同数、80～84歳が26%と最も多い。68%が一人暮らしだが、21%は家族と同居。56%は介護保険の要介護認定を申請していない。経済状態に「余裕がある」「ややある」が計31%。20%が精神疾患、44%が糖尿病や高血圧など慢性的な病気があった。

センターの保健師らは通常、問題に気づけば医療や介護を受けるよう勧めるが、「放っておいて」と拒まれることが少なくない。調査でも、「支援がとても困難」というケースが42%に達し、「本人が拒む」という理由が47%で最も多かった。

岸教授は「埋もれた事例も多く、高齢者だけで年に1万件のセルフネグレクトが起きている可能性がある。早くに見つければ改善しやすいので、社会として把握し介入する仕組み作りが求められる」と話す。

(3月8日付朝日新聞)

ワクチン同時接種問題 接種再開の判断は見送り

細菌性髄膜炎などを予防する小児用肺炎球菌ワクチン「プレベナー」や、ヒブワクチン「アクトヒブ」などを同時接種した乳幼児の死亡が相次いだ問題で、専門家などで構成する厚生労働省の調査検討会は8日、死亡した5人の症例について、「現段階ではワクチン接種と死亡の間に

明確な因果関係は認められない」と結論づけた。

一時見合わせている接種の再開については、複数のワクチンを同時接種した場合の影響などに関する詳しい情報が必要として判断を見送った。2週間後をめどに開催される検討会で最終結論を出す。

死亡したのは兵庫、神奈川など4府県の乳幼児5人。プレベナー、アクトヒブ、DPT(ジフテリア・百日ぜき・破傷風混合ワクチン)、BCG(結核予防ワクチン)のうち2~3種類を同時接種し、1~3日後に亡くなった。

(3月9日付読売新聞)

スポーツロジ、初の国際学会 スポーツと健康の関係探る

第1回国際スポーツロジ学会が5日、東京都文京区の順天堂大学有山記念館講堂で開かれ、国内外の研究者約500人が参加した。

スポーツロジはスポーツと健康の関わりを科学的に解明する新しい学問分野。生活習慣病の予防や治療、要介護につながる高齢者の転倒・骨折予防、認知症の予防などにスポーツを生かす方法を探る。

国内では2007年、同大学大学院にスポーツロジセンターが設置された。医学部やスポーツ健康科学部と連携し、個々の体質に応じた肥満予防のためのスポーツ療法など、多くの研究を行っている。

学会では、同大学准教授の鈴木大地さんが講演。ソウル五輪100メートル背泳ぎで金メダルを取った経験談や、後進の指導法などを披露した。また、ランニングによる脳機能の活性化など、さまざまな研究報告が行われた。

(3月10日付読売新聞)

外国人看護師候補 滞在1年延長を決定

菅内閣は11日、インドネシアとフィリピンから受け入れている看護師、介護福祉士の候補者について、滞在期間を1年間延長させることを正式に閣議決定した。本人の意欲や今年度の試験の成績など、一定の条件を踏まえて限定的に認める。

厚生労働省などによると、この夏に滞在期限を迎えるのはインドネシアからの看護師91人。このうち、2月に実施された国家試験に不合格となった場合の候補者を対象にする。滞在延長を認める条件として、本人意思や試験成績のほか、受け入れ施設が研修改善計画をつくって適切な研修を実施する環境を整えていること、などをあげた。

両国と署名した経済連携協定(EPA)では、看護師の候補者について3年間の日本滞在を認めている。2008年8月に来日した第1陣は、3月25日の国家試験の結果発表で不合格なら帰国を迫られることになっていた。

一方、看護師国家試験では、日本人の9割が合格するのに対し、EPAで受け入れているインドネシア人とフィリピン人の昨年の合格率はわずか1%と少なく、外交上の配慮もあるとみられる。

(3月11日付朝日新聞)

そううつに抗うつ薬 学会「勧められない」

日本うつ病学会は、そう状態とうつ状態を繰り返す「双極性障害」(そううつ病)の初の治療指針をまとめ、10日、ホームページで公開した。この病気のうつ状態の時に抗うつ

薬を使う医師は少なくないが、「科学的根拠がなく、勧められない」と明記、抗うつ薬の安易な使用を戒めている。

双極性障害は、100人中1~4人が発症するとされる精神疾患。国内では、この病気ですつ状態になった患者に対し、気分安定薬と抗うつ薬を併用したり、抗うつ薬を単独で使ったりする治療が少なくない。

しかし指針では、海外の研究で、気分安定薬と抗うつ薬を併用する治療は、気分安定薬だけの治療と比べて、効果に差がなかったことを指摘。また、抗うつ薬を使うと、感情が不安定になる危険性が高いことなどを挙げ、「抗うつ薬の使用は推奨されない」と明示した。

(3月11日付読売新聞)

東日本大震災 被害は過去最大規模

11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0のきわめて強い地震が起き、宮城県北部で震度7の烈震を観測した。地震の規模は1854年12月の安政の大地震を上回り、過去最大規模の地震災害となった。

沿岸部を襲った大津波により、東京電力の福島第1、第2原子力発電所が被災。放射性物質の排出などの影響が懸念されるほか、電気、ガス、水道などのライフラインに大きな影響を与えている。

警察庁の発表によると、死者数と行方不明者は2万6000人を越え、関東地方や北海道でも死傷者が出る事態となっている。

(3月12~24日付各紙より)